

令和8年2月20日

静岡歴研

第172号

静岡県歴史研究会

発行人 須山忠治

会報

令和7年12月7日(日)

第146回研究会

鈴木氏・杉井氏発表

日本列島、とりわけ北日本は寒波が押し寄せ冷え込みが続き、インフルエンザも例年よりも早く流行している。同様に高市首相の台湾をめぐる発言で日中関係も冷え込んでしまった。

だが、温暖な静岡では今日も小春日和で12月とも思えない温かさの中、第146回の研究会が静岡市歴史博物館内の講座室で午前11時より開催された。本日は会員の参加予定者のうち4名が体調不良で欠席であったが、杉井・鈴木両氏の所属する「駿府十返舎一九研究会」の会員の皆様の参加もあり23名の参加であった。

鈴木康久氏発表

「明治維新のおける光と影」

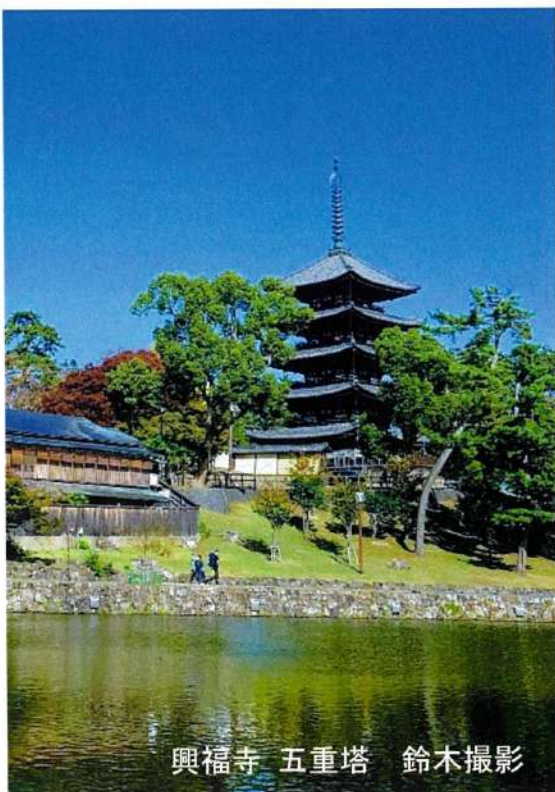
「廃仏毀釈とは」

鈴木氏は77コマのパワーポイントと20頁の配布資料にて発表した。以下その内容をまとめてみる。

1. はじめに

私は「まことに小さな国が開花期を迎えようとしている」から始まる、司馬遼太郎の『坂の上の雲』が好きで5回ほど読み直した。この物語は秋山兄弟、正岡子規などの成長を通じて明治時代の輝かしい光の部分に焦点をあてている。日本が欧米列強に追いつこうとし、眠れる獅子といわれた清国や超大国ロシアと戦い、そして勝利した。

この時代の日本は輸出品と言えば生糸、茶、蚕種ぐらいで、産業と言えるものはほとんどなかったのである。そのような状況の中で日本は列強の脅威にさらされており、近代化と富国強兵が最大の課題であった。それでも、人びとは明るい姿で描かれている。



興福寺 五重塔 鈴木撮影